

【論文】

伊藤整と「文章論」の時代

尾形大

伊藤整と「文章論」の時代

目次

- 一 文章論をめぐる研究史と問題の所在
- 二 『日本現代文章講座』と〈新しい文章論〉
- 三 伊藤整の文章論
- 四 まとめ・展望

要旨

一九三五年前後に文壇内で盛り上がりを見せた文章論は、従来谷崎潤一郎の『文章読本』（一九三四）を直接の契機とするものと考えられてきた。しかし、実はそれ以前に文章をめぐる様々な発言・議論が蓄積され、ある意味『文章読本』が登場する以前にその土壌はすでに準備されていたと言いうことができ。ただここで注目すべきは、この時準備されていた土壌の実態が、谷崎の「含蓄」を旨とする「文学

的」な文章論とは異なる〈新しい文章論〉だったという事実である。この主知的な文章研究の動きとその系譜に関して、これまでほぼ等閑に付されてきた。本稿は、この時期の文章論の重要な拠点のひとつであった厚生閣書店および『日本現代文章講座』全八巻（一九三四・四一）が目指した〈新しい文章論〉の内実とその水脈を掘り起こすとともに、やはりこの時期文章の問題に多く発言を寄せた伊藤整の一連の文章論を整理・分析し、同時代の文章論の中に位置付けることを目的としている。

一 文章論をめぐる研究史と問題の所在

「文章論」「文章研究」というと、随分幅広い領域を包含する用語として用いられるが、戦後になって一応次のように定義されるにいたった。

文章論の定義 国語学界においては2つの意味に用いられている。その一は、修辞学、文体論、文章作法、表記法、文章心理学などの文章に関する理論の意味である。その二は、文法論の一領域としての理論の意味である。文法論の一領域としての理論は、さらに2つに大別される。一つは、「文論」と同義で、文の構造に関する理論であり、今一つは、時枝誠記が『日本文法口語編』(1950)において提唱した文章の構造に関する理論である。¹⁾

日本の文章論は西洋の先進文化・文明の移入が急がれた明治期にはじまり、当初修辞学を中心に勃興し展開した。もう少し具体的に言えば、坪内逍遙『小説神髓』(一八七九)に引用されたことで知られる菊池大麓訳「修辞及華文」(一八七九)²⁾を嚆矢とする日本の文章論は、西洋の修辞学の流入とともに始動し、言文一致運動と連動する形で日本語の文章を技術的・学術的に整理・体系化する動きとして盛り上がった。それが言文一致体の一応の定着を見た大正期以降、作家個人の文体を文学的・芸術的観点から鑑賞する文体論へと推移していく。こうした修辞学を中心とする文章論の歴史的展開について、波多野完治は次のように概略している。

明治時代には、わが国の文章研究は、なかなか

さかんであったものである。三上参次博士の『美辞学』、坪内博士の『美辞論稿』などは別格としても、明治三、四十年代だけでも、夏目漱石の文学論をはじめとして、島村滝太郎の『新美辞学』、五十嵐博士の『新文章講話』、杉谷代水の『作文講話及文範』など、修辞学上の名著が相続いてあらわれている。これらの修辞学書は、いずれも英米修辞学の影響をうけて成立したものであり、とくに連想心理学者中の二人の大立物、アレクサンダー・ベインとスペンサーの修辞学の影響がいちじるしく、心理学説の点からみれば、今日では新しいといわれないが、しかしこれらの外国できの修辞学をよく消化して日本化している点では驚異にあたいする、といってもよいくらいである。(中略)ところがこの勢は、大正に入るとびたり止ってしまった。³⁾

戦後間もなく日本の文章論史を整理した西尾光雄⁴⁾も波多野のこの文章を引用し、持論の見取り図として利用している。その上で「明治十年代の文章研究」、「明治二十年代の文章研究」、「明治三十年代以後の文章研究」、「大正時代の文章研究」、「昭和時代の文章研究」と時期を区分した章立てでその当時の文章論の特徴を考察している。

では、文学研究の領域で文章論という問題はどうのように注目されてきたのだろうか。基本的に明治期

を中心とするものが研究の多くを占め、たとえば言文一致体や翻訳・翻案の問題との関わりを分析した研究や、田山花袋編集『文章世界』（一九〇六・三）（一九二〇・一二、全二〇四冊）に代表される投書雑誌とそこに集った作家志望者、指導規範の問題に注目した研究、あるいは児童文学と綴方教育との接続をめぐる研究などが蓄積されてきた。こうした方面の研究が充実する一方で、西尾の言う「昭和時代の文章研究」という区分に関しては特定の視点からの考察に終始してきたように思われる。その視点とは、谷崎潤一郎『文章読本』（一九三四）に代表される「含蓄」を旨とするいわゆる「文学的」な文章観や、実生活に根差した生活綴方が理想とした素朴実感的な文章観である。たしかに両者はこの時期の重要な文章観として位置付けられるのだが、これらを指針とした文章論に目を奪われている限り、一九三〇年前後に若い文学者たちが模索した（新しい文章論）の実態、とりわけそこで伊藤整が果たした役割をとらえることはできない。一九三〇年前後に文学者の間で修辭学でも文体論でもない（新しい文章論）をめぐる主知的な文章研究の動きがたしかにあった。彼らのそうした欲求・欲望の背景について千葉亀雄は次のように述べている。

歴史性から見て、文学上の「様式」が特に文学の世界で、主要な「理論闘争」の題目として持

ち出されることは、大抵の場合、文学が内容的に行きつまり、それを技巧でカムフラージュするための、必要が起る場合にあるやうだ。（中略）。この二三年谷崎潤一郎の文章論その他、文章論といふものが注目されて来た現象は見落としてならないもの、一つ。

心境小説と本格小説をめぐる論争から新感覚派文学、形式主義論争、新興芸術派、そして新心理主義文学までを見渡した発言と思われるが、一九三〇年前後は何よりプロレタリア文学の隆盛や映画技術・設備の飛躍的向上等にともない、いわゆる芸術派文学の深刻な危機が叫ばれた時期でもあった。そしてこの時期、文章の問題に言語学や国語学の分野からだけでなく文学の領域からも多く発言が寄せられ、文学者の手による大小様々な文章論が相次いで発表されている。従来この現象が取り立てて注目されてこなかった理由のひとつに、一九三四年一月に刊行された谷崎潤一郎『文章読本』（中央公論社）の存在がある。当時数万部を売り上げたとされる同書は、まもなくこの時期の文章論の中心に公然と据えられ、あたかもその起点であり直接の契機であるかのように認知されることになる。こうした認識が一九三五年時点で早くも共有されていた事実の一端は千葉の発言からもうかがえる。

谷崎の『文章読本』の七ヵ月前、モダニズム系出

日本現代文章講座

報月

昭和十年六月五日印刷
昭和十年六月八日發行
東京・神田・下六番町
發行所 厚生堂
電話九段三二一八
振替東京五九六〇〇

愈々 次は

第六回配本

《指導篇》!

興味溢るゝ具體的實踐研究

本篇は講座の第六巻だ。續刊の、方法、技術と併せて、文章實際指導の名トリオを爲すもの、單語や形容詞の活し方から各種論文の組立法、感想文から日記文の要領に廣告文の書き方に至る迄、少くとも、一般教養人の必修すべき興味ある實際研究を盛つた。

素材選擇法	(藤 森 成 吉)
現代造語法	(春 山 行 夫)
詩歌修辭法	(佐 藤 一 英)
散文修辭法	(塚 本 哲 三)
現代文章と漢文賦	(後 藤 朝 太郎)
現代文章と標準語	(磯 田 良 平)
現代文章と學術語	(波 多 野 完 治)
現代文章と外來語	(荒 川 徹 兵 衛)
現代文章と新語	(淺 原 六 朗)
現代口語文法	(三 宅 武 郎)
假名遣法	(木 枝 增 一)
現代敬語法	(菊 澤 季 生)
單語と用語法	(今 泉 忠 義)

形容詞と用語法	(湯 地 金 壽)
說明詞と用語法	(松 本 金 壽)
社會論の構成	(室 伏 高 恒)
人生論の構成	(石 丸 梧 平)
自然論の構成	(加 藤 一 天)
宗教論の構成	(本 莊 可 示)
藝術論の構成	(矢 崎 實 郎)
哲學論の構成	(三 木 實 郎)
教育論の構成	(原 田 實 郎)
人物論の構成	(大 宅 壯 一)
經濟論の構成	(小 汀 利 得)
感想文の表現と指導	(相 馬 御 風)
抒情文の表現と指導	(今 井 達 夫)
追憶文の表現と指導	(津 尾 須 磨 子)
日記文の表現と指導	(白 石 實 三)
書翰文の表現と指導	(平 松 幹 夫)
廣告文の表現と指導	(倉 本 長 治)
翻譯文の表現と指導	(中 村 白 雲)
論說文の表現と指導	(高 須 芳 次 郎)
報告文の表現と指導	(水 野 華 香 舟)
形式文の表現と指導	(服 部 嘉 香)
解説文の表現と指導	(加 宮 貴 一)
文章研究法	(井 汲 清 治)
文章上達法	(諏 訪 三 郎)
文章教授法	(金 子 彦 三 郎)
文章朗讀法	(日 下 部 重 太郎)
文章記述法	(加 藤 作 次 郎)
文章論の構成が三木清氏、人物論の構成が室伏高信氏だ。	

し、以て文章講座本来の使命を達成しようとするのである。

素材選擇法が藤森成吉氏、日記文の表現と指導白石實三氏、感想文相馬御風氏、追憶文津尾須磨子氏、翻譯文、中村白雲氏といつた顔振られた。

廣告文の表現と指導が斯界の第一人者倉本長治氏、同人雜誌の編輯と技術がその道の雄達小野松二氏、これで、その項目と執筆者が、何時もながら一分の隙も無く選ばれてゐるのがお分り頂けやうと思ふ。

單語と用語法、形容詞と用語法、及び說明詞と用語法の諸項目は、語句と文章との關係を究め、文章構成に分解的な根本の理解を興へるであらう。

口語修辭法、現代口語文法の重要な法、現代造語法から文章教授法に至るまで、一として現代文章構成研究の機微に觸れないものはない。

若しその一部を抽出した如く、初心者頁にその一部を抽出した如く、初心者頁に秘奥を公開して、割す無きもの、文章研究法と相俟つて、諸賢の、本講義により啓發されるもの甚大なるべきを信じて疑はないのである。

現代文章と新語の研究、標準語から學術語、外來語の研究、それに現代文章と敬語、漢文賦等々、これ等みな凡ゆる觀點から文章機構の科學的究明を遂行せんとする本講座の特に力を致

せる項目である。

日記文、書翰文、感想文、抒情文、論說文等々、日常われわれの生活と最も密接なる關係にある實用の表現指導は、既刊五冊の知識の應用として、本篇に主座を占め、必ずや會員諸賢の喝采を博するであらう充實さだ。

文壇人すらも言ふ、かくの如き廣闊な文章研究講座の出現は、凡そ、こゝと文章に關する限り、根こそぎ今後書くべき題目を刈り取るものであると、われわれの理想は着々として實現し、あと二巻を以て早くも講座完結の日を迎へやうとしてゐる。

残つてゐるものは「方法篇」と「技術篇」だ。そしてその何れもが實際的に「如何に書くか」を教へるものだ。それだけに編輯に方つては萬全の用意を果したものだ。われわれは今富士の頂上を完全に征服し、砂走りを下る爽快さの中にゐるのだ。

未知の方々、遠くはアメリカ、樺太、滿洲あたりから上海に至る全日本の會員諸賢から引きも切らず感謝と激勵と希望とを載せたお手紙を頂戴する。文壇學壇有識の方々は勿論、大學中學女學小學の各層を網羅する學校方面特に鐵道省から文部省、それに東京その他大都市の市役所區役所、商店員の方々から工場員の人々、またインテリ婦人の方々から本講座は絶大の支持を得てゐるのである。

こゝに記して厚く感謝の意を表明すると同時に、かくも廣汎なる會員諸賢の御支援に答へるもの、これら一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

版社の厚生閣書店から『日本現代文章講座』（一九三四・四一）という全八巻の講座の配本が開始されている。やはり『文章読本』の影に隠れて今ではほとんど注目されることのないこの講座は、多くの文学者を動員し文章に関する広範な意見・研究を提示した企画であった。論者が入手した『日本現代文章講座』の内の数冊にたまたま「月報」が残されており、たとえば次のような文章が掲載されていたので紹介しておきたい。

現在文壇に於ける文章研究熱が、谷崎潤一郎氏の文章読本に発してゐるごとく考へられてゐるのは大なる誤謬である。文章の科学的研究は心理学の発達により近日西欧諸国に於ても日に盛んであつて、この機運を看取し、本来の文章研究が古き修辭学研究を一步も出てゐない現状を慨し、われわれが本邦文化のために本講座第一版を刊行したのは谷崎氏の文章読本の出る十ヶ月も前のことだ。しかも文章読本が何ら科学的研究の結果になるものでないことは周知の事実であり、一個人の私見に自からをあてはめることの危険は心ある者の警戒を要するところだ。

われわれはこゝに、われわれの功績を誇らうとするのではない。たゞ現時、文壇に於て谷崎氏の声望のみ高く、その結果、一般文章研究の

真摯なる学徒を誤らしめるなきかを慎ふる以外に他意があるわけではないのだ。

一九三四年中に全八巻が刊行された『日本現代文章講座』は、数年の間に少なくとも三回の増刷がなされた形跡が見られ、現在のところ一九三四年と一九三五年、一九三七年の二つの版が確認されている。いずれの版も同じデザインで、改訂・改稿・増補の形跡も見られず、唯一奥付の印刷年月日・発行年月日だけが書き換えられている。実はこのことが、後に新潮社版『伊藤整全集』の「編集後記」の誤りをもたらすことになる（詳しくは後述する）。今回引用した「月報」は一九三五年増刷分に付されたものだが、この発言からは当代有数の名作家・谷崎潤一郎の手による『文章読本』と、文章を「心理学」的見地から「科学的」に「研究」した『日本現代文章講座』とを根本的に区別し、その領域開拓のプライオリティを主張する編集者・前本一男（まえもと ひとお）の意気込みがうかがえる。元「三田派の新進」の前本の調子が激しいのは、講座の後継誌として同年四月に創刊された月刊文章雑誌『月刊文章講座』があつたからだろう。もちろん谷崎の『文章読本』のエッセンスが「饒舌録」（『改造』一九二七・二一）や「現代口語文の欠点について」（『改造』一九二九・一一）の時点ですでに仄めかされている事実を差し引いても、「月報」の発言はいわゆる文芸復興期に『文章読本』

が文壇内で大きな反響を呼ぶ土壤があらかじめ整えられていた証左のひとつとして重要な意味を持つ。

波多野寛治は一九三四年時点で「いちじ下火であつた文章研究が、最近ふたたび、さかんになつてきた」とし、その要因のひとつに「心理の叙述、分析、解剖」を中心とする「心理小説の勃興」を指摘している。この発言の約一年前に「新しい文章論」を企図した『日本現代文章講座』の配本がスタートしたわけだが、両者がいずれも人間の心理の世界に眼を向けている事実は一九三〇年代の文章論を考える上で大きな手がかりとなる。また、塩田良平の「現代の文章は文学的範囲では新感覚派とプロ文学の余沫を受けてその整理期に当つてゐる」という同時代状況の認識も、一九三四年時点で「現代の文章」問題の起点を新感覚派に置いた把握であり、やはり波多野や講座と同じと言えるだろう。つまり、海外の新文学・新思潮の直接の影響下に新感覚派の文学が芽生え、その系譜の上に心理小説への新しいアプローチも移入・受容された。そしてそれにもなつて新しい文章を要求する声が高まるような状況が呼び込まれた、という見取り図が浮かび上がってくる。文章をめぐる一連の流れについて、西脇順三郎はジョイスの『ユリシーズ』までを視野に入れて次のように整理している。

イギリスで戦後十年間の文学中、文学的文学と

いふべき新文学運動の文学が盛に立派な作品を出したのであつた。この種の文学は今日一般ヨーロッパ文学界に於て異彩を放つたのである。(中略) この新しい文学は戦争直前からそろ／＼あつたもので、戦争を過ぎて、戦後十年間に輩出されたものであつた。(中略)

(5) 先づ小説の方面では James Joyce というアイランド人の小説家が最も重大なものであつた。その人の重大で最大な小説は「ユリシーズ」であらう。

昭和初年代に日本の文壇でフロイトの学説が本格的に受容され、それにもなつて個人の心理の世界、無意識の世界が文学表現の対象として明確に見据えられるようになる。その延長上にプルーストやジョイス等の新文学が相次いで翻訳・紹介されていくわけだが、それら新文学の翻訳者・紹介者には自らも小説家を志す若い人々が少なくなかった。一九二八年に東京商科大学入学のために北海道から単身上京した伊藤整もその一人だった。上京後の伊藤は、百田宗治が主宰する詩誌『椎の木』や春山行夫編集のクォーターリー『詩と詩論』周辺の文学グループと交友を深め、新文学の紹介者として東京での文学活動を開始する。詩から小説へと表現の舞台を移した伊藤は、フロイトの精神分析をほぼそのまま取り入れた短編小説「感情細胞の断面」(『文芸レビュー』一

九三〇・五)で川端康成に激賞される。その後、記憶の世界に沈滞する主人公の内面を多面的に描出したプルースト風の短編小説「アカシアの匂に就て」(『文芸レビュー』一九三〇・八)や、ジョイスの意識の流れの手法を用いた意識の流れ小説群を相次いで発表する。さらに『ユリシイズ』の翻訳者、クォータリー『新文学研究』の主宰者・編集者、新心理主義文学を提唱する新進批評家とその活動は多岐におよぶ。それらに加えて、一九三三年頃から伊藤はたびたび文章の問題に言及するようになる。

本稿は厚生閣書店および『日本現代文章講座』を中心に盛り上がった〈新しい文章論〉の実態と系譜を明らかにするものである。また同時に春山行夫や厚生閣書店と深いつながりを持った伊藤整の文章論の内実と推移を〈新しい文章論〉群の中に位置付け、一定の見通しをつけることもあわせて目的としている。付記すれば、伊藤は同講座に積極的に参加するだけでなく、月刊文章雑誌『月刊文章(講座)』以降も厚生閣書店とともにこの分野で重要な役割を果たしていく。以上の問題の考察は、文芸復興期と呼ばれる文学場の諸現象の一端を明らかにすることにもつながるだろう。

二 『日本現代文章講座』と〈新しい文章論〉

この時期の厚生閣書店の活動に関するまとまった

調査・研究は、管見の限り曾根博義「厚生閣(書店)とモダニズム文学出版」(『日本近代文学館年誌 資料探索1』、二〇〇五)および「雑誌『教育・国語教育』掲載の文学作品」(『解纜』第二号、一九八七・九)を除いてほぼ見当たらない。曾根によると、それまで「教育系の小出版社」だった厚生閣書店が「時代の先端を行くモダニズム文学の新しい雑誌や図書の発行元に変身」するのは、百田宗治が後輩の詩人・春山行夫を「送り込んだ」一九二八年以降のことと考えられるという¹⁶⁾。春山が編集を担当したクォータリー『詩と詩論』全一四冊(一九二八・九〜一九三一・一二)、同じく春山編集の『現代の芸術と批評叢書』全二冊(一九二九・四〜一九三二・六)の刊行が日本のモダニズム文学の展開に画期的な役割を果たした事実は周知の通りである。また、生活綴方運動の指導者の一人で同社編集顧問を勤めていた千葉春雄編集の月刊雑誌『教育・国語教育』が一九三一年四月に創刊されている。千葉は百田宗治と協調しながら同誌を当時の綴方教育運動推進・改革の拠点のひとつへと成長させていく。

当時の文章をめぐる状況について千葉春雄は、『教育・国語教育』と平行して編集した『最近の文学・文章研究と国語教育』(厚生閣書店、一九三二)の中で、国語教育と文学との密接な協力関係を「永遠の真理」と評した上で、「文学は、最近に於て、その外形から内容に至るまで、非常に改革された」と

し、それにともなつて「最近の文学文章の問題を攻究」する必要を説いている。こうした千葉の問題意識は、芸術派系・プロレタリア系の垣根を越えて若い文学者を動員した同書だけにとどまらず、『教育・国語教育』でも文学者の側からの多くの文章論を呼び込む姿勢として一貫するものであった。

たとえば阿部知二は、「現代文章上の諸問題」(『教育・国語教育』一九三一・八)の中で従来の文章の停滞を指摘すると同時に、新しい文章の方向性、すなわち〈新しい文章論〉を射程にとらえた論考を発表している。前年『現代の芸術と批評叢書』の一冊として『主知的文学論』(厚生閣書店、一九三〇)を刊行し、誌上で千葉に「現文壇の寵児」(『編集後記』)と紹介されている阿部は、文章の変化と社会の変化とを重ね合わせた分析を展開する。「現代」社会の特徴を「科学的精神」と「速度」という二要素で読み解き、前者からは「分析の発達」を、後者からは近代人の「鋭敏な神経」を象徴するかのような「急テンポ」の文章と、反対に極端に「スピードを落し」た「極度に細密に対象を描写分析」する文章の出現とを指摘し、それらの結実としてジョイスの『ユリシーズ』を挙げている。(『新しい文章論』の嚆矢とも言うべき阿部の考察には、同時期の伊藤の新心理主義文学理論¹⁸⁾との顕著な類比性がうかがえる。その意図はさておき、互いの新知識を融合させるような彼らの協調的姿勢は興味深い。

このように『教育・国語教育』には阿部や伊藤のように『詩と詩論』や『現代の芸術と批評叢書』周辺の若い文学関係者がしばしば発言を寄せている。当時モダニズム移入の前線基地を支えた春山行夫、綴方教育分野の千葉春雄、そして両者をつなぐ百田宗治。彼らの集った厚生閣書店は、この時期文学とモダニズムと教育とが交錯する〈場〉として新たな役割を担うことになったと考えられる。若い文学者による〈新しい文章論〉が発信される環境はこのように整えられ、そこに集った海外の新文学・新思潮に敏感な若手の文学関係者が多く動員されるという事態が招来されていく。

こうした環境下に編集者・前本一男を中心に企画・編集された『日本現代文章講座』全八巻(一九三四・四―一一)が刊行される。顧問には島崎藤村(作家)・徳富蘇峰(ジャーナリスト)・佐佐木信綱(詩人)・五十嵐力(国語学者)・下村海南(ジャーナリスト)出身の政治家)という各分野の大家五名が据えられ、全五テーマ三一九項目を、一〇〇名を越える執筆者が分担している(二人最大三項目まで)。青野末吉や宇野浩二、佐藤春夫、萩原朔太郎、堀口大学、武者小路実篤といったベテランの執筆陣に加えて、川端康成や小林秀雄、堀辰雄等の新しい世代を牽引する文学者群が名を連ねている。さらにそこに伊藤整や瀬沼茂樹、福田清人ら、当時まだ実績の乏しかった若手に積極的に執筆機会を与えた点の特徴的と言

えよう。配本スケジュール（一九三四年）は以下の通りである。

四月	第一卷 組織編 ※伊藤整「芸術的文章構成の精神」
五月	第八卷 鑑賞編
六月	第四卷 構成編 ※伊藤整「心理の表現」
七月	第七卷 研究編
八月	第一卷 原理編
九月	第六卷 指導編
一〇月	第二卷 方法編 ※伊藤整「単行本の編集と技術」
十一月	第五卷 技術編

田村泰二郎は第一回配本の第三卷「組織編」の中で、従来の文章論を批判的に総括して次のように述べている。

私が反対するのは、これ等の、人間を作れとか、腹を作ることとか、ありのままを書けとか、素直に書けとか、さういつた言葉の示す意味の不確実さ、不徹底さ、そして今日の文章法乃至文

章教育といふものが、いまだに左様な段階に止つてゐる、といふことへの不満に外ならない。／＼新しい時代の、そして新しい文章を探索しようとする我々は、新しい時代に相応しい方法、即ち、もつと主知的に、分析的に文章術を研究し、習得せねばならぬと考へるのだ。

田村が「反対」する従来の文章・文章論とは、たとえば正岡子規ら根岸派の写生文運動や自然主義風の平面描写、大正教養主義的な人格形成の延長に位置付けられた（文は人なり）型の文章論、あるいは作文教育、綴方教育の場面での生活指導と表裏をなす素朴実感的な文章指導を指す。ここではそうした文章へのアプローチ自体の再検討が提案され、その上で「新しい時代に相応しい」「主知的」で「分析的」な（新しい文章論）という指針が示されているのである。とは言うものの、その具体的な方法・理論・成果は明らかにされていない。講座全体で緩やかに共有され目指されている（新しい文章論）の方向性は、川端康成や阿部知二の発言からもう少しはつきりと読み取ることができる。

新しい意味での文章論は、日本ではまだ誰も手がつけてゐないやうである。／＼ダイブムや表現派や超現実派の移入には、当然の結果として、その文章論も伴つて来た。なぜなら、これ

らの文学の新奇な表現は、文章論なくしては、理解も同情も得られないからである。／これらの文学は、言葉に束縛されてゐる人間の心が、それを逃れようとして、もがき苦しむ悲鳴とも見られた。²¹⁾

現代の一特性（中略）これは心理的な意識の極度に発達した一部現代文学が取る文章であつて、古典主義的な、均衡と明確とを好む文章と対立すべきものと考へられる。心理の流れは、必ずしも論理的明晰とは一致しないからである。現代文学上の一現象として、非常に注意すべきことであり、ジョイスなどのしてゐることは、たしかに文章上の一大革命である。²²⁾

先に結論を言えば、同講座は幅広いジャンルを総合した網羅的な試みではあつたが、そこで確たる「新しい文章論」が結実することはなかつた。しかし、複数の執筆者の間で共有された「新しい文章論」の性格、方向性および文章史的な見取り図は多分に示唆的であり、当時の文章観、さらには文芸復興期の文学場の一端を物語っている。

川端は、人間の心理世界の超現実的な形態、極大化した内面活動の描出を対象としたダダイズムやシュル・レアリズムを「新しい文章論」の起点に据えた見取り図を提示している。この新たに開拓された文学表現の領域は、日本の心理小説に重要な転換

をもたらし、浪漫主義的な方向とリアリズムの方向とに分岐しながら追求されていく。ジョイスやプルーストがその延長上に呼び込まれたと述べる阿部の認識は、「現代文章上の諸問題」（前掲）以来一貫している。

それら最新、最先端の文学受容は、必然的に新しい文章の模索、技術やスタイルを説いた文章論への関心を高めていく。「新しい文章論」として想定されていた方向は、同講座が指針として見定めた海外の新文学のラインナップが何より顕著に物語っている。第八巻「鑑賞編」収録の「西欧作家鑑賞」で取り上げられたのは、「ポオル・モオランの文章」（堀口大学）、「マルセル・プルウストの文章」（堀辰雄）、「アンドレ・ジイド」（今日出海）、「ジェムズ・ジョイスの文章」（永松定）の四名であつた。

それらの内で日本で最初に本格的な翻訳・紹介がなされたのがポオル・モオランの *Quvert la nuit*（一九二二）の翻訳、堀口大学訳『夜ひらく』（新潮社）現代仏蘭西文芸叢書（五）収録、一九二四）だつた。佐藤春夫は「この新進作家は（中略）ダダイストだといふことだが、第一に文章が頗る新しいのです。面倒臭い常識的のつなかりがまるでないのです。自分に興味のあるところだけ深入りして、しかも突放して書き並べてあるのです」とモオランの文章の新鮮さを説明している。堀口の手による同翻訳が新感覚派の文章・文体に大きな影響を与えた事実を周知

の通りだが、新しい文体実験の出発地点として、さらには「心理小説の勃興」の最初として同訳が位置付けられている。このように成立し開花した新感覚派の文体・文章について伊藤整は、「全く口語体に墮し終えて飛躍とか華々しさとか修飾とかいうことを殺してしまった自然主義系等の文章に対する反抗」・「反動と評し、『夜ひらく』を境に新旧の文章が移行したと分析している。新感覚派の新しい文章の展開について瀬沼茂樹は次のように論じている。

新感覚派文学の誕生以来この国の文章は著しくその面貌を変じた。その一つの特色は、新しい文章が極めて理化し、それとともに感情が排斥されるに至ったことである。(中略) 理知的裁断が文章制作の至上権を握り、感情は押し潰され、芸術の本質までも理化したやうに喧伝された。単に散文的な文章のみならず、元來が抒情を中心とする詩的な文章にまで及ぼされ、あらゆる芸術的な文章がかういふ軌道を辿って行くかみえた。²⁶

「カイゼル・トルラア等の表現派の文体」や、プロレタリア文学の方面では「ピエエル・アムプの文体」の模倣などが相次いで試みられたものの、同講座が見据えるモオランの直接の延長線上に位置付けられたのは、やはりプーラストやジョイスらによる

文体実験であった。すなわち「ジェイムス・ジョイスの意識の流れや、マルセル・プルウストの回想的連想法」の受容の直接の影響下に、まさにこの時期の文章論が展開していったのである。

さらに言えば、これらモダニズムの産物を輸入・翻訳・紹介し、その文学方法を自らの文学に取り入れようと試みたのは、いずれも若い文学志望者たちであり、その拠点のひとつが『詩と詩論』であった。この流れはとくに芸術派系の文学者の間で共有され、たとえば堀辰雄編集の『文学』第六号（一九三〇・三）では「僕らの紹介したランボオやプルウスト」の導きを受けて「漸く新しい傑作を生むための」〔編集後記〕準備が整ったと記され、その後雑誌『作品』創刊号（一九三〇・五）でも小林秀雄が「雑誌界の最も信頼するに足る貿易港の一つでありたい」〔編集後記〕と外国の新文学の紹介・翻訳を重視する姿勢を掲げている。『詩・現実』創刊号（一九三〇・六）でも「世界文学への我々の不断の展望と検討」が唱えられ、伊藤が主宰した『新文学研究』にも継承され、「日本の新しき文学がとらねばならない理論と作品の上に於ける技術を吾々は提出する。何によつてであるか。世界の新しき作品と新しき文学方法の研究とによつて！」と宣言されている。外国の新文学の翻訳・受容を通してこそ〈新しい文学〉を創出し得ると信じた若い翻訳家たちがこの時期一斉に登場する。こうした「文学者意識」につ

いて伊藤は次のように回想している。

外国文学への関心と自己の創作とを同じ場所
 考えることは、その頃の作家にない習慣で、そ
 れは明かに『詩と詩論』の作り出した文学者意
 識で、堀辰雄と阿部知二とがその型の先行者
 だった。たしかその頃（中略）雑誌『風車』と
 いうのに永松定という人がジョイス論を書い
 た。（中略）その雑誌は五高出の東大系の連中
 だという噂であった。私たちと同じ無名の作家
 群であった。³⁰

海外の新文学に原文で、あるいは翻訳や紹介を通
 して接することのできる環境下で文学的に育まれて
 きた彼らは、伝統的な日本語・日本文学に正面から
 向き合い再検討することを恐れなかった。彼ら新し
 い世代の文章観は、日本の古典への回帰、伝統的な
 「含蓄」への回帰を数年後あらためて提言する谷崎
 の『文章読本』と相容れないものでありながら、一
 方で文章という領域を問い直す必要性を訴え、その
 ための環境を整備していったという意味で『文章読
 本』を呼び込む役割を果たしたと言うことができる。
 こうした新しい文学状況について深田久彌は次のよ
 うに述べている。

又私たちの文章は故郷を失った文学だとも云は

れています。どこを見回しても日本的なものな
 どないと云はれてゐます。さういふわけで、現
 代の文章には外形的には日本古典の文章の影響
 などは殆ど認められないと思ひます。むしろ先
 に言つた通り翻訳文章の影響がはびこつてゐる
 やうに考へられます。（中略）近頃の若い作家
 の流行は何といつてもジェイムス・ジョイスと
 マルセル・プルウストでせう。³¹

深田は小林秀雄「故郷を失った文学」（『文芸春秋』
 一九三三・五）の主張を文章の問題まで敷衍してい
 る。小林は明治以来日本の近代文学に入り込んだあ
 まりに大きな西洋の影響を指摘した上で、現代の「自
 分たち青年層」はすでに西洋の影響を内面化した段
 階に達し、もはや元に戻るべき「故郷」を喪失した
 とする。しかし、そうした代償を支払う代わりに、
 自分たちは西欧文学を「はじめて正当に忠実に輸入」
 し得たと述べてもいる。まさしく伊藤整もこの「自
 分たち青年層」の一人として、海外の新文学の翻訳・
 紹介者として小林のすぐ後ろを歩んでいた。そして
 この著名な文章と同月、伊藤も評論「日本文の問題」
 （『新潮』）ではじめて文章の問題を具体的に取り上
 げるのである。

三 伊藤整の文章論

文章に関する伊藤の発言をあらためて整理してみると、新潮社版『伊藤整全集』（一九七二～七四）および曾根博義編『未刊行著作集二』伊藤整（白地社、一九九四）に未収録の文章や、あるいは同全集「編集後記」で掲載誌・発表年月等に誤りがあるものが少なからず確認される。以下、一九三六年頃までの伊藤の文章に関する発言を発表年順に整理していく。

私がジョイスで受けた影響はスタイルについての意識的に考えるという習癖であった。（中略）それで私はジョイスに触発された文体のことを幾度か評論に書いた。³⁴

伊藤の文章観はジョイス『ユリシイズ』の翻訳体験を通して形成されたと考えて間違いないだろう。ジョイスを通して人間の内面世界の振幅、意識の流動する様を、細密かつあるがままに描写する日本語の文章の必要に迫られた伊藤は、まさに当時要求されていた〈新しい文章論〉の最前線に位置していた。

二十世紀文学の偉大な作家たちは、必ずその仕事を心理の世界と関連させているし、また自らそういう意図や主張を持たない作家たちにして

も、その作品の研究には多く心理学の助けをかりなければならぬ有様である³⁵

こうした基準に照らして、伊藤は島崎藤村『夜明け前』を「現代の新しい小説」の条件、すなわち「分析的な精神、解剖の精神が不足」していると、まさに先の阿部知二（『現代文章上の諸問題』）と同様の観点から批評している³⁶。もちろん藤村の「大きさ」と「文章の品格」とを認めた上での発言だが、やはりモオラン受容以降の新しい文学に育まれ、それを自認し、しかもその新しさを掲げていた伊藤にとって、人間の心理の領域を「心理学」をベースに「分析」「解剖」する作意は小説そのものに不可欠であった。そしてこれを描くための文章が日本語に見付からないという現実が伊藤の文章論の中心的課題となる。彼のこうした主知的な文章観は、小林秀雄の言う「自分たち青年層」を体現するかのようにも映る。一方で、とくに文章・文章論という問題に関して伊藤と小林との間に大きな相違も浮かび上がってくる。以下、伊藤の文章論の推移を整理していく。

①「日本文の問題」で伊藤は、小林と同様に明治以降の外国文学の移入がもたらした影響の大きさを認めている。しかし、続けて「事実上の問題として日本文学は、それ等外国文学とは甚だしく異なったものである」とし、海外の新旧文学をいくら輸入し受容しても、結局のところ「日本文学の質に沿うて

伊藤整と「〈文章論〉の時代」

年		月	番号	タイトル	掲載紙誌	備考
一九三三年		五月	①	「日本文文の問題」	『新潮』	
一九三三年		九月	②	「新しい文章への考察」	『国語教育の科学的研究』（『教育・国語教育』別冊）	「編集後記」ミス
一九三三年		十一月	③	「翻訳の研究」	『英語英文学講座』第六回配本	
一九三四年		一月	④	「現代文章論」	『教育・国語教育』	全集等未収録
一九三四年		四月	⑤	「芸術的文章構成の精神」	『日本現代文章講座』組織編	「編集後記」ミス
一九三四年		六月	⑥	「心理の表現」	『日本現代文章講座』構成編	「編集後記」ミス
一九三四年		一〇月	⑦	「単行本の編集と技術」	『日本現代文章講座』方法編	全集等未収録
一九三四年		十一月二六 〜三〇日	⑧	「文芸時評」	『朝日新聞』	
一九三五年		四月	⑨	「小説論」	『日本大学芸術科講座』文芸編	
一九三五年		四月二〜七 日	⑩	「文芸時評」	『中外商業新報』	
一九三五年		八月	⑪	「名文読本―『或る女』より」	『月刊文章講座』	全集等未収録
一九三五年		十一月	⑫	「児童の綴方作品」	『教育・国語教育』臨時増刊号	
一九三五年		十一月	⑬	「性格描写の文章」	『月刊文章講座』	
一九三六年		一月	⑭	「時代相を描いた文章」	『日本大学芸術科講座』文芸編	⑭〜⑰は、同月刊行の
一九三六年		一月	⑮	「現代の文章」	『日本大学芸術科講座』文芸編	『日本大学芸術科講座』
一九三六年		一月	⑯	「文章の生理」	『日本大学芸術科講座』文芸編	文芸編に収録。同書は
一九三六年		一月	⑰	「心理描写の文章」	『日本大学芸術科講座』文芸編	⑨の続編にあたる。
一九三六年		一月	⑱	「小説論（一）」（翻訳）	『現実』	全集等未収録※スコット・ジェームズの翻訳
一九三六年		三月	⑲	「小説論（二）」（翻訳）	『現実』	
一九三六年		未詳	⑳	「小説思考の類廃」	初出未詳	

の「発展」をせざるを得ない。なぜなら、西洋文学との間にはけつして越えられない根本的な相違が存在し、それが日本の文学表現を支配しているからだ、という持論を展開する。具体的には、主語と動詞の距離の遠い日本文は「根本的に長いセンテンスを書く」のには向いておらず、俳句や短歌のような短い形式の文学作品に適していると指摘する。また、事物の細部を適確に指し示し得るだけの語句の細分性の欠落、象形文字特有の視覚的連想性の強さ等を理由に、日本語には「少数語句の配置」による「釣り合い」によって特定の雰囲気を生み出すことに「特有な機能がある」とその特徴を整理してみせる。翻訳活動を通して目の当たりにした日本語の特性を分析した①の時点では、その認識の範囲内で新しい文章を模索しようという意識がうかがえる。

こうした日本語特有の語脈と語句、文字の特性に注目する伊藤の文章観は、同年九月の②「新しい文章への考察」で比較的まとまった分量の論文として発展的に論じ直されていく。³⁶⁾ 同論は小宮豊隆「発句翻訳の可能性」(『文芸春秋』一九三三・八)の翌月、すなわち翻訳文学をめぐる問題があらためてクローブアップされたのと同じ時期に発表された文章で、③「翻訳の研究」(一一月)とともにこの時期の伊藤の一連の文章論の中心となっている。同論で伊藤は、「高級文芸」(純文学)と「低い層の文学」(大衆文学)とでそれぞれ用いられる文章を区別しつつ、

やはり西洋語・西洋文と日本語・日本文の語彙・文脈の比較検討を通して日本語の文章の特性を分析する。たとえばブルースト文学を「極度な分析的な微細な表現」と評し、現在の日本語では表現し切れないその「曖昧複雑な文章」に注目している。その上で人間の意識・無意識の世界をその極限まで微細に描写するブルーストやジョイスの文章を念頭に、「新しき文学」の実現には新しい文章が必要だと主張する。そのためには根本的に語彙・語脈が異なる日本語・日本文の限界を認めたと上で、「英語の文脈」に慣れた現在の読者層を想定した英語文に引き寄せた文章、実学系の訳文で用いられるような「まわりくどい分析的な言葉」をあえて採用し、従来倦厭されてきた直訳体の効果を見直すべきではないかと提案する。³⁷⁾

新しい文学は「心理の世界と関連」するはずが、それを描出するための「日本語の文脈が心理描写に不利である」(⑥「心理の表現」というこの時期の伊藤の主張は、一見すると翻訳家特有の突飛な発想と思われかねない。しかし、②「新しい文章への考察」以降の分析は日本語・日本文の可動範囲を正確にとらえたものであり、その日本語観・文章観の根ざすところは翌年末の谷崎の『文章読本』「一文章とは何か」内「西洋の文章と日本の文章」と驚くほど近似している。

次いで⑤「芸術的文章構成の精神」(『日本現代文

章講座』一九三四・四）が発表される。同論は新潮社版全集の第一四巻に収録されており、「編集後記」には「昭和十二年十一月十四日厚生閣書店より刊行の『日本現代文章講座』組織編に掲載」と記されている。しかし、これは『日本現代文章講座』が複数回増刷されたことに起因する誤りで、実は一九三四年という早い時期に発表された文章論として考えなければならぬ。同論はその後一九四〇年刊行の『現代文章講座』第五卷（三笠書房）に「芸術的文章の精神」と改題して再録され、伊藤の代表的な文章論として流通していく。そこでもやはり「芸術的文章」と「芸術的文章以外の目的を持つ文章」とが区分され、両者の融合する地点に新しい文章が生れる可能性があると述べられている。芸術的感動とは、けっして形式・文章だけでも材料・主題・内容だけでも成立し得ないとし、両者の適切な連動こそ重要であると具体例を多く用いて丁寧に説明している。その上で「ある作者の文章に特有な一つの傾向とか、型」として「文体」の問題を取り上げ、やはりこれも「文体」だけ独立して芸術的効果を発揮するものではなく、「意味」と分かちがたいと続ける。このあたりで伊藤は〈新しい文章論〉という文章単独での芸術表現の模索を諦め、方針を修正しはじめている様子が見えてくる。そして同論の半年後に刊行された谷崎の『文章読本』が伊藤の文章論に新たな視野をひらくことになる。

伊藤は⑧「文芸時評」で同書を高く評価し、文学における「技術論・スタイル論」の重要性を指摘する。また、⑩「文芸時評」〔中外商業新報〕一九三五・四・二〇六）でも、谷崎の『文章読本』の出現によってあらためて「文章論が色々の人の手にとり上げられてかなり盛ん」になったとし、さらに「今迄に色々と受け入れた海外文学の影響に乱されていた文章を整理すべき時になっている」、「何等かの統一ある体系を日本文に造り上げてほしい時代に来ている」と述べている。これはまさに谷崎の「文学的」文章論と主知的な文章論との融合の意志の表れと考えることができるだろう。伊藤は作家の個別的な技術論・スタイル論にとどまらず、関係代名詞の欠落や主語と述語の距離の遠さ、形容詞や副詞の曖昧さといった日本語の特質を十分に踏まえた全般的な議論の必要性をあらためて説いている。とくに連続的な心理描写を表現するうえで関係代名詞を持たないことが最大の弱みだとする認識は、伊藤と谷崎の間で完全に共通している。しかし、当然二つの文章論の融合は果たし得なかった。伊藤は⑫「小説思考の類廃」（一九三〇）の中で谷崎の『文章読本』とは異なる文章観を再び提示し差別化をはかる。これは谷崎の次のような発言を念頭に置いたものである。

こんには何事も科学的に、正確に述べることが流行る、文学においても写実主義だの心理描

写だのと申しまして、見たことや思ったことを、根掘り葉掘り、精細に、刻明に、事実の通りに移すことが喜ばれる、けれどもこれは、われ／＼の伝統から云えば上品な趣味ではないのでありまして、(中略) われ／＼は、生の現実をそのまま、語ることを卑しむ風があり、言語とそれが表現する事柄との間に薄紙一と重の隔りがあるのを、品がよいと感ずる国民なのです。⁽³⁸⁾

こうした谷崎の文章観に対して伊藤は②「小説思考の頹廢」で次のように異を唱える。

書いているものが単純な身辺瑣末事であつても、感覚の生活を誤魔化しなく通りぬけたものは、外界物に残された痕跡を捉えてその生活を示すのだ。(中略) だがいかに切実に描かれてあろうとも、我々がこの痕跡(外界物に面に残された痕跡)のみの世界に安住したとは思われない。それよりもつと説明的でありたいのだ。説明しすぎること恐れるほど日本人の弱点はない。(中略) 谷崎潤一郎は文章読本その他で、新しい文学の説明のしすぎる弊について書いているが、それは特殊な資質のある筆者の仕事を理解する鍵ではあつたが、私は進歩的な説でなかつたと思う。私は、説明ということが作家の持つている思考の世界と切り離せない関係にあ

ると思ひ、躓きや饒舌や煩雑さがあつても、その方がいいと思う。

春山行夫と出会い『詩と詩論』に参加して以来、常に海外の新文学の動向に注目し先頭で受容し紹介しつづけてきた伊藤は、『ユリシイズ』翻訳を通して文学のスタイル・技術、そして文章の問題への関心を深めていった。その彼に谷崎の説く日本の伝統的な表現を追求した、「含蓄」を主眼とする文章論は、けつして全面的に受け入れられるものではなかつた。なぜなら、人間の意識の取り留めのない流動を、その微細な点までありのままに描出するジョイスの意識の流れを表現し得る日本語の文章を模索する伊藤にとつて、文章の「躓き」や「煩雑さ」とはけつして弊害ではなく、むしろ正確さの証明でもあつたからだ。人間の内面を「分析的」に「解剖」する作意は、「まわりくどい分析的な言葉」を恐れることなく用い、たとえ「説明のしすぎる」としても自らの思考を「饒舌」に「説明」することこそが文学の新しいスタイル創出の鍵と考えた。とはいえ、この「饒舌」な「説明」を意識的かつ直接的に採用し、新しいスタイルを実現する小説は、やはり『得能五郎の生活と意見』(河出書房、一九四一)や挿話ごとくにスタイルを変える『ユリシイズ』風の手法を試みた『鳴海仙吉』(細川書店、一九五〇)を待たねばならない。⁽³⁹⁾

四 まとめ・展望

ここまで一九三〇年代の文章論の系譜、展開、成果をモダニズム受容のコンテクストの中で掘り起こしてきた。とくに厚生閣書店と『日本現代文章講座』を軸に整理・考察し、その上で小説家として認められ本格的な活動をはじめた以前の伊藤整の文章論の特徴と推移を明らかにした。それによると、ポオル・モオラン／堀口大学以降のモダニズム文学の系譜の上に展開した主知的な文章論は、心理の世界の細密な分析の表現を目指してなされたものであり、それを体現する小説として伊藤や阿部、堀や小林らが取り組んだジョイス、プルースト、ジイドらが位置付けられていた。しかし、それらの小説から〈新しい文章論〉を抽出し構築するのは、日本語と英語・フランス語の語彙・語脈の相違等から困難を極めた。このように主知的な文章論が模索された一方で、まもなく谷崎の『文章読本』が刊行され、文章論の領域は「文学的」な方向に取って代わられることになる。ジョイスの翻訳活動を通して〈新しい文章論〉を指向し、次第にその実現性に疑いを抱くようになった伊藤は、英語の直訳体の採用といった日本語の改革を提案しつつ、二つの文章論の融合を模索する。ただ、結局は「含蓄」を旨とする谷崎の文章論の「説明しない」姿勢とは相容れず、人間心理を饒舌に描写・説明する方向へと舵を切り直すという流

れが明らかになった。なお、この時期の伊藤にまつた谷崎論は見られないが、このような文章をめぐる影響・受容を通して戦後の貴重な谷崎論の素地が形成されていったと考えられる。たとえば次に引用した「陰影礼賛」の解説は、そのことをよく物語るだろう。

過去という暗い闇の中から、時には文献により、時には記憶によつて一部分のみを引き出し、それに照明を与えるような書き方のほうが真の芸術的効果を生む、という考え方と、この漆器の美の発見とは、同質の思考法によるものである。／つまり「春琴抄」は、闇の中のほのかな光に照らされた時の漆器の美しさに似たものを文学作品として追求し、成功したものと考えることができる。⁴⁾

最後に当時伊藤が文章論に関心を寄せた背景をもう一点補って展望としたい。この当時の伊藤の創作上の停滞を、曾根博義は次のように年譜にまとめている。

昭和八年（一九三三）二十九歳／『ユリシイズ』時代去り、以後二、三年間、創作の筆滞⁴⁾る。

一九三二年頃から「幽鬼の街」（『文芸』一九三七・

八) あたりにかけて、伊藤は創作面で長く停滞する。その間彼の文学活動を支えたのは、翻訳家と文章の専門家という二つの大きな仕事・役割だった。「日本現代文章講座」の配本と同じ一九三四年四月、伊藤は川端康成の後任として日本大学芸術科講師となり、創作論その他の講義を担当することになる。そこでの講義内容は翌年四月に『日本大学芸術科講座1』の一冊『小説論』としてまとめられる。五〇頁程度の薄い小冊子状の同書には、小説論や海外文学論とともに文章論も収録されており、この時期の伊藤の関心の所在をうかがい知る貴重な資料と言える。さらに言えば、同年三月創刊の『月刊文章講座』(一九三五・三―一九四二・五)では当初、①「名本読本―『或る女』より」(一九三五・八)のような小説鑑賞を担当するなどしていたが、「幽鬼の街」発表の翌月には自身の創作の内幕を披露する創作ノート「創作手帖」(一九三七・九)を開示し、さらに「小説作法」(一九三九・三―一九四二)を連載するなど、次第に小説家としての立場で文章論に言及する機会が増えていくことになる。

註

- (1) 日本国語教育学会編『国語教育辞典』(朝倉書店、二〇〇一)
 (2) 原典は W. C. Chamber's: *Information for the People* (二八六〇頃か?) 中の *Rhetoric and Belles-Letters* の翻訳。

『百科全書』の一冊として刊行された。

- (3) 波多野完治「レトリックの再生」(『思想』一九三四・九)、底本は『波多野完治全集』第一巻(小学館、一九九〇)に拠る。
 (4) 西尾光雄『近代文章研究』(刀工書院、一九五一)
 (5) それぞれに関する近年の代表的な研究として、高橋修「明治の翻訳ディスクロール―坪内逍遙・森田思軒・若松賤子」(ひつじ書房、二〇一五)、紅野謙介「投機としての文学―活字・懸賞・メディア」(新曜社、二〇〇三)、中谷いずみ「その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ」(青弓社、二〇一三)を挙げておきたい。
 (6) 千葉亀雄「現代文章論概論」(『日本現代文章講座』第一巻「原理編」一九三四・八)からの引用。ただし、この時点では同年一月刊行の谷崎潤一郎『文章読本』(中央公論社)は近刊の予告のみだった点に注意されたい。
 (7) 川端康成は「一九三一年創作界の印象」(『新潮』一九三一・二二)の中で、プロレタリア派に押された既成の文壇、とくに新感覚派の流れをくむ「芸術派の作家」たちの深刻な停滞を文壇の「萎靡沈滞」と評している。
 (8) たとえば、一九三三年から一九三五年にかけて『国語科学講座』全七七巻(明治書院)や『日本文学講座』(改造社)、ほかにも『岩波講座日本文学』全二〇巻(一九三二―一九三三)、『岩波講座世界文学』全一五巻(一九三二―一九三四)等が相次いで刊行され、それぞれの内で文章をめぐる大小の議論がなされている。
 (9) 『月報』第五号(一九三五・七)内の「編集後記」より引用。

論者が確認した月報は、一九三五年版に挟みこまれたものである。残念ながら一九三四年版では確認できていない。

- (10) 「編集後記」(『教育・国語教育』一九三三・四)
- (11) 同誌のタイトルは、第一巻のみ『月刊文章講座』で、第二巻一号以降は『月刊文章』と変更されている。
- (12) 波多野完治「レトリックの再生」(前掲)
- (13) 塩田良平「現代文章概論とくに明治の口語文と現代の口語文について」(『日本現代文章講座』第二巻「方法編」収録)
- (14) 西脇順三郎「現代イギリス文学」(『日本現代文章講座』第七巻「研究編」収録)
- (15) 一九二九年末からアルス版『フロイド精神分析大系』(全一五巻)と春陽堂版『フロイド精神分析全集』(全一〇巻)の刊行が開始され、精神分析学関連の評論が急増する。
- (16) 伊藤も白伝小説『若い詩人の肖像』(新潮社、一九五六)の中で「春山が多分百田氏の紹介で入ったところの厚生閣という本屋」と発言している。
- (17) 千葉春雄「趣旨」(『最近の文学・文章研究と国語教育』厚生閣書店、一九三二)
- (18) たとえば伊藤整「ブルウストとジョイスの文学方法について」(『思想』一九三二・四)など。
- (19) 『古雑誌探求』(論創社、二〇〇九)等の貴重な仕事を積み重ねている小田光雄は、論創社ホームページ「出版クロニクル」内の「古本夜話 第二三四回」(<http://dhtena.ne.jp/OdaMitsuo/20110922/1316654977>)の中で、前本一男が「これだけ多彩にして、フルキャスト的な『日本

現代文章講座』の企画・編集のすべてを仕切ったとは考えられない。(中略) 実質的に春山行夫が企画・編集で重要な役割を果たした」と推測している。たしかに春山が同講座刊行の前年、一九三三年中頃に厚生閣書店を退社するまでに、ある程度の企画や執筆者の人選等を済ませていたものと思われる。ただ、この前本一男という『三田文学』周辺から出発したと思われる無名の編集者が、この企画の後を受けた月刊雑誌『月刊文章講座』の編集をはじめ、文章をめぐる雑誌や書籍、講座等の編集担当として活動をつづけることも見落とせない。したがって、本稿では奥付の表記にしたがって同講座の編集者を前本とした。

- (20) 田村泰二郎「文章とモラル」(『日本現代文章講座』第三巻「組織編」収録)
- (21) 川端康成「文章制作の精神と方法」(『日本現代文章講座』第二巻「方法編」収録)
- (22) 阿部知二「散文の構成」(『日本現代文章講座』第三巻「組織編」収録)
- (23) 『夜とさす』(新潮社、一九二五)所収の佐藤春夫「夜ひらく」を讀みて」(『時事新報』一九二四・十・二)
- (24) 『夜ひらく』は数度の全面改訂を経て、一九二九、一九三三年にも刊行される。文芸復興期の文壇にも影響をおよぼしたものと想像される。
- (25) 伊藤整「現代の文章」(『日本大学芸術科講座』一九三六・一、後に『私の小説研究』収録、一九三九)
- (26) 瀬沼茂樹「表現とセンチメント」(『日本現代文章講座』第四巻「構成編」収録)

- (27) 塩田良平「現代文章と欧文脈」(『日本現代文章講座』第六卷「指導編」収録)
- (28) 川端康成「文章制作の精神と方法」(『日本現代文章講座』第二卷「方法編」収録)
- (29) 伊藤整「新文学研究」のレゾン・デエトル」(『紀伊国屋月報』一九三二・二)。
- (30) 伊藤整「新興芸術派と新心理主義文学」(『近代文学』一九五〇・八)
- (31) 深田久彌「古典精神と現代文章」(『日本現代文章講座』第三卷「組織編」収録)
- (32) 伊藤整「翻訳余談」(『芸術科』一九三五・一〇)
- (33) 伊藤によるジョイスの文学の受容の実態とその経緯に関しては、拙稿「翻訳家・伊藤整と一九三〇年代―第一書房版『ユリシイズ』翻訳を軸として」(『国語と国文学』二〇一七・六、掲載予定)で詳しく論じた。
- (34) 伊藤整「心理の表現」(『日本現代文章講座』第四卷「構成編」収録※全集編集後記ミス)
- (35) 伊藤整「文芸時評」(『中外商業新報』一九三五・四・二一～二六)
- (36) 新潮社版全集第三卷「編集後記」の「昭和八年四月二〇日発行の雑誌『教育国語教育』特別号第三輯に掲載」とい記載は誤り。正確には『教育・国語教育』別冊、千葉春雄編『国語教育の科学的研究』(一九三四・九)に収録されたもの。
- (37) 伊藤整の翻訳論に関しては、拙稿「翻訳家・伊藤整と一九三〇年代―第一書房版『ユリシイズ』翻訳を軸として」(『国語と国文学』二〇一七・六、掲載予定)を参照されたい。
- (38) これは谷崎の『文章読本』を受けて書かれた土井光知「文章論」(『改造』一九三五・三)や佐藤春夫「文芸時評」(『文芸春秋』一九三五・四)等まで包含した発言である。
- (39) 谷崎潤一郎「文章読本」三「文章の要素」「品格について」
- (40) 『得能五郎の生活と意見』における「饒舌」の問題は、拙稿「得能五郎の生活と意見」における「余談」的方法の水脈―ゴーゴリ・中野重治・伊藤整の系譜―(『昭和文学研究』第七一集、二〇一五・九)で詳しくあつかった。
- (41) 伊藤整「解説 陰影礼賛 他」(『谷崎潤一郎全集』第二十二卷、中央公論社、一九五八)
- (42) 曾根博義「伝記伊藤整」(六興出版、一九七七)所収「年譜」、五四一、五四二頁
- (43) 『日本大学芸術科講座』(日本大学出版部、一九三五)は、当時の同大講師を執筆者とする著作集で、各三〇～六〇頁前後の七冊の冊子(縦二三cm×横一五cm)で構成され箱に収められている(非売品)。それぞれ、浅原六郎述「文芸批評論」(文芸編)、伊藤整述「小説論」(文芸編)、橘高広述「映画芸術発達史(上)」(映画編)、瀬沼茂樹述「文芸思潮論」(文芸編)、飯塚友一郎述「日本演劇史(上)」(演劇編)、山際靖述「芸術概論」(芸術編)、牛山充述「西洋音楽史」(音楽編)の全七冊。